

前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義

川 畑 純

【要約】 鏃は古墳時代全期間を通じて、多くの古墳からの出土がみられる器物であり、その変遷観の確立は、ひろく古墳の年代決定に資するものである。またそのような、どの時代の古墳からも出土するという鏃の資料的特性は、同一の器物に基づき古墳時代を通過して分析することを可能とする。しかしながら、そのような役割が期待されてきたにもかかわらず、古墳時代前期の鉄鏃・銅鏃は十分な編年的検討がおこなわれてこなかった。そこで本稿では、古墳時代前期および中期の鉄鏃・銅鏃の編年をおこなった。個々の鏃の形態変化の方向を示した後に、鏃の形態・組成の変化と共伴遺物の変遷が相関することを示した。そして、組成の変遷の画期をとらえることで四期、細別七段階の段階設定をおこなった。さらに、各期において流通している鏃形式と実際の古墳にみられる鏃組成との比較をおこなうことにより、前期中葉以降、鏃形式の刷新と並行して鏃の生産体制と流通機構が段階的に集約されていくあり様を明らかにした。

史林 九二巻二号 二〇〇九年三月

はじめに

古墳に副葬された品々は、古墳時代社会のあり方の一端を示していると考えられる。そして、古墳からは実に多種多様な武器が出土し、副葬品の中でも大きなウエイトを占めている。つまり、武器に対する検討は、古墳時代社会の特質を考究するための一つの重要な手段として位置づけることが可能である。その中でも「矢」は、有機質の腐食によりその一部

品である「鏃」のみを遺存する例が大半であるものの、古墳時代全期間を通じて副葬され続ける器物である。そのため、矢と鏃は時間軸に沿ってその動態を追究するのに適した遺物と考えることができる。また、その形態的な多様性は、当時の社会が鏃に付与した様々な性格の反映として想定することが可能である。年代決定のための有力な副葬品を他に持たず、鏃のみがその古墳の年代決定のための資料として期待される古墳は決して少なくない。古墳時代研究のための基礎作業である古墳の相對編年観の確定に、今後も鏃が寄与する箇所は多いといえる。

鉄鏃・銅鏃は、はやくは後藤藤一により検討対象とされており、「古墳副葬品としては（中略）普遍的性質のものであり、（中略）若しこれが年代観を確立することが出来るならば、古墳研究、ひいては上代文化発展の考究に資するところ多からう^①」と述べたことは、資料の特質を的確に表現したものである。一方で、鏃にみられる「形態的多様性」もまた、年代観確立のために有効なものとして考えられてきた。しかしながら、鏃の形態的多様性は、翻って非常に雑多で複雑な現状の資料状況を生み出し、総合的な把握を困難なものとしている。そのような資料状況に対応する形で、時期や地域を限定した研究が多く現れ、限定的な編年作業の試みや、鏃の形の組み合わせに基づく地域性の抽出から鉄器生産・流通のあり様を論じる試みがおこなわれているといえる。また特定形式のみを検討対象とし、その変遷と生産・流通の背景を明らかにしようとする研究も多く、「威信財」といった言葉に示されるような社会的な機能を積極的に論じていく試みもみられる^④。

しかし、鉄鏃や銅鏃を対象とする研究が非常に多くの方向性を志向している一方で、現在の古墳時代研究の水準と現状の資料状況を満足させうる、総合的な変遷観と年代観が確立されているとは言い難い。遺物そのものの変遷観に基づく年代的枠組みの設定は、出土遺跡の年代観に依拠した研究とは異なつた次元での議論を可能とする。長期保有や伝世といった、社会的背景をもとに生じる器物の特殊な所有状況について、より本質的な議論をおこなおうとするのならば、このような作業が前提としておこなわれていなければならないのである。基礎作業としての変遷観確立の重要性は明らかである。

本稿では、古墳出土の鉄鏃・銅鏃を検討対象としてその編年をおこなう。そうして得られる変遷観に基づいて提起される問題点について若干の考察を試みたい。

- ① 後藤守一 一九三九 「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第五四卷第四号 一頁。
- ② 尾上元規 一九九三 「古墳時代鉄鏃の地域性——長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として——」『考古学研究』第四〇卷第一号 六一—八五頁。水野敏典 一九九五 「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢Ⅳ——滝口宏先生追悼考古学論集——』四二—四四頁。大谷宏治 二〇〇四 「東と西の挟間——古墳時代後期の鉄鏃にみる東海・甲信地方の特質」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立三〇周年記念論文集』二五七—二七六頁など。
- ③ 関義則 一九九一 「逆刺独立三角・柳葉形鉄鏃の消長とその意義」『埼玉考古学論集』六八—七〇九頁。池淵俊一 二〇〇二 「神原神社古墳出土整頸式鉄鏃に関する試論」『神原神社古墳』二二—二四二頁。鈴木一有 二〇〇三 「二段逆刺鉄鏃の象徴性」『静岡県考古学研究』三五 七三—九〇頁など。
- ④ 松木武彦 一九九一 「前期古墳副葬鐵の成立と展開」『考古学研究』第三七卷第四号 二九—五八頁。鈴木一有 一九九九 「古墳時代中期前半における鉄鏃組成——五ヶ山B二号墳——」九三—九九頁。鈴木一有 二〇〇〇 「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』七五—九四頁。

第一章 研究史と本稿の視点

1 研究史

先述の通り、古墳出土の鉄鏃・銅鏃に関わる先行研究の方向性は非常に多様である。本章では、主に本稿が目的とする鏃の分類と編年に関わる先行研究について整理をおこなう。その他の、機能論などの研究についても、必要に応じて適宜論及する。

現在用いられる鏃の分類と名称の大枠は主に後藤守一^①と末永雅雄^②により設定された。後藤の作業は個々の鏃を極限にまで細分し、それぞれの鏃が有する要素名の羅列による個別名称の設定と分類をおこなうものである。その上で石鏃や正倉院御物との形態比較からそれらの年代的な位置づけを試みている。さらに「類銅鏃式鉄鏃」とした銅鏃と同様の形態を呈

する類例を古式として位置づけ、他例についても出土古墳の年代観から位置づけの妥当性の検証をおこなっている。分類の基準や系統性の理解などに問題を残すが、後藤により古墳時代の鉄鍬の年代的な位置づけの大枠は定められたといえる。一方の末永は後藤とは異なり、より大局的な視点から分類をおこなっている。細身でより実戦的な形態とみなされる「細根系」や、大型で扁平な「平根系」といったまとまりを抽出し、個々の鍬の差違を横断した共通性に基づく名称の設定と分類をおこなった。濱田耕作・梅原末治らによつて早くから集成の対象とされた銅鍬は、鉄鍬と比べて形態の規格性が高いことから分類は主要な論点とはならず、森本六爾が述べるように単純から複雑へという変遷を遂げたものとして形態的特徴から変遷観を明らかにしようとする試みがみられた。その中で「筥被」^④を持つ例や十字の鍬^⑤を持つ例などが新式のものとして理解されることとなる。このような視点に基づく変遷観は、今井堯が銅鍬の変化の方向性として、銅質の変化と形態的な形式化・大型化を認め、実用品から非実用品へとその性格を変化させたものとして理解したことも通じるものである。^⑥

これら鍬研究の黎明期においては、鍬形態からその変遷を明らかにしようとする試みがみられたといえる。その一方で他の遺物の編年観が確立していくのに従い、それらをもとにして得られる古墳の年代観に依拠して、年代的・系統的な整理をおこなう論考が多く現れることとなる。特に地域を限定した古墳時代後期の鉄鍬の年代整理が盛行したことは、須恵器の編年の大綱が確立したことと表裏の現象として理解できよう。^⑦

主に古墳時代後期を中心として、地域的・時期的に限定された研究の蓄積がなされた後、杉山秀宏により古墳時代を通観した全国的な鉄鍬の編年研究がおこなわれる。^⑧杉山の論考は、古墳時代を通じて鉄鍬の変遷を追究することを可能とし、また、古墳時代後期において鍬形態の分布に地域性が発露することを明確化するなど、非常に重要な位置づけが与えられる。特に古墳時代後期については、その後、分布の地域性の背景について、鉄器の生産体制や軍事組織論といった視点を加味することで検討がおこなわれ、より詳細で多様な考察が試みられることになるなど、鉄鍬研究は一つの到達点にある

といえる。^⑧

その一方で、前期・中期の資料については、それぞれ異なった研究視点からのアプローチが現れることとなる。特に前期の鉄鏃・銅鏃に関する論考においては、古墳時代開始論をその射程に入れることで、鏃の形態やその組み合わせの変革を、社会変化の中に位置づけようとする試みが活発におこなわれたといえる。川西宏幸は鉄鏃・銅鏃を形態・素材・製作技術・分布など、非常に多角的な視点から分析し、古墳から出土する「形態変革」を遂げた鏃に、弥生時代の鏃とは異なる「儀仗の具」としての評価を与える。そして「儀仗用矢鏃の生産・分与の創業」を「古墳時代の開始を告げる点鐘」と位置づける。^⑨ 松木武彦は鏃の形態と古墳における副葬位置の差異を勘案し、古墳時代前期の鉄鏃・銅鏃を一括したうえで「有稜系」「平根系」「細根系」の三種に再分類する。そして古墳時代の開始期を前後して導入されるそれぞれの鏃に、異なった機能的・社会的背景を想定する。^⑩

さらに松木は前期の銅鏃の編年作業をおこなう中で、規格性が強く精密な造作が施されたものから、形態が弛緩した一群へと変化するという方向性を提示している。^⑪ この形態変化の方向性は、高田健一が銅鏃の製作手法の詳細な分析により提示した、製作段階における省力化という製作技術上の変化の方向性の理解と調和的である。一方、前期の鉄鏃については、変化の方向性とその意義が明確に論じられることは少なく、個々の資料を出土した古墳の年代観からその盛行時期が言及される程度であった。^⑫

前期における年代整理作業が主に個別の資料の検討に向けられたのに対し、中期における編年作業は、より画一的な資料状況を背景として網羅的な年代整理を志向したといえる。主に、短頸式鉄鏃の長身化や長頸式鉄鏃への転換といった視点から、水野敏典や鈴木一有により4ないし5段階の変遷として整理がなされている。結果として、鏃編年が最も安定的かつ実用的なレベルに達しているといえる。^⑬ その中で、中期前半の短頸式鉄鏃が漸次的に長身化し、中期後半以降に主流となる長頸式鉄鏃へとスムーズに変化するというあり方が否定され、その移行に隔絶性が内包されていることが明らかに

されている。^⑥短頸式鉄鍬・長頸式鉄鍬とともに韓半島においても出土する形式であり、両者の変遷には強い影響関係が想定されていたが、その一方で日本列島内での鉄鍬変遷の独自性が示された点は、両地域の相対編年を考える上でも大きな意味があるといえる。^⑦

2 本稿の視点

以上、主に編年に注目して先行研究を概観した。編年や分類という視点においても、古墳時代前期・中期・後期において全く異なった研究状況にあることがわかる。杉山の論考のみが明確な通時性を備え、かつ詳細な論述のおこなわれているほとんど唯一のものである。また、階層的に鍬の分類をおこない、樹形図状に提示される分類結果の論述は詳細になさば修正の余地が大きい。^⑧さらに、その年代整理手順に関わる論述は不十分であり、そのため杉山の論考を前提として、新出資料を加えた上で新たに立論することは難しいと考える。

その一方で、杉山以降の研究が、分節化された時間幅の中でそれぞれ異なった視点から編年を組み立て、それぞれ多様な方向性を志向しているものが主流であったことは、先に述べた通りである。そのような先行研究にのみ依拠して、鍬を切り口とする単一の視点から、古墳時代を通観する議論を試みることは、やはり不適切であろう。また、杉山の論考に限らず鍬の「編年」研究においては、分類手順の説明に多くの頁数を割きつつも、実際の年代整理にあたっては、他の遺物から与えられる出土古墳の年代観にのみ依拠して年代毎に「割り振っていく」という作業が主流であったことは注意しておく必要がある。

中期・後期については、その方法論は問わないにしても、個別の作業によりおおむね鉄鍬の変遷観は確立していると考ええるが、一方で前期の編年は十分に議論されているとはいえない。一貫した方法論に基づき、前期から中期における鍬編

年の確立は、鍬形態の変遷や組成の変容の評価のみならず、派生的な論点である生産や流通といった諸問題について中期以降との一貫した議論をする際の素地となるものである。さらにはおおむね定見を得ている中期における鍬編年の評価についても、重要な影響をもたらすべきものである。そして、普遍性の高い遺物である鍬の基礎的な分析は、古墳時代における鉄器生産・武器生産の様相を考える上でも、重要な位置づけが与えられるべきものである。

以上のように、古墳時代全期間を対象として、一貫した論理に基づいて鍬編年をおこなうことの重要性は明らかである。しかし、先行研究が示すように、後期においては鉄の国内生産の開始を背景とすると考えられる鉄鍬の分節的な地域性の発露がみられ、前期・中期とはその資料状況が一変する^⑬。そのため本稿では、さしあたり前期・中期を検討の対象とし、一貫した視点と方法論に基づいた鍬編年の構築を試み、その有効性を提示することに努めたい。ただし、後期に顕在化するとされる、鉄鍬の地域性を勘案する必要性をのぞけば、本稿で採用する方法論の妥当性が認められるならば、中期と連続する後期の鍬の編年もまた、本稿の延長線上でおこないうると考える。

層位的に資料の前後関係を検証しうる例に乏しい古墳副葬品のうち、多数の資料を一括して副葬することの多い鍬においては、鍬身形態の変遷とその組成の分析、続く共伴遺物による変遷観の検証が、編年の構築において最も有効な方法であると考える。また、その作業過程を明確化することのみが今後も継続するであろう資料状況の変化においても本稿の妥当性の検証とその修正を可能とするものである。

- ① 後藤守一 一九三九 「上古時代鉄鍬の年代研究」（前掲）。
- ② 末永雅雄 一九四一 「日本上代の武器」。末永雅雄 一九六九 「日本鉄鍬型式分類図」『古代学』第一六卷第二一四号 二七二—二九六頁。
- ③ 濱田耕作・梅原末治 一九二六 「日本発見銅鍬聚成表」『切利支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第七冊 八九—一〇一頁。
- ④ 森本六爾 一九二九 「銅鍬考察と本古墳出土例の占むる位置」『川柳村將軍塚の研究』 五八—六七頁。
- ⑤ 今井堯 一九六〇 「銅鍬について」『月の輪古墳』 三〇四—三〇五頁。
- ⑥ 小久保徹ほか 一九八三 「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ——鉄鍬について——」『研究紀要』 一一七—三頁。小森哲也 一九八四 「栃木県内古墳出土遺物考（一）」『栃木県考古学会誌』第八集

五三一—九二頁。関義則 一九八六 「古墳時代後期鉄鍬の分類と編年」『日本古代文化研究』第三号 五一—二〇頁。飯塚武司 一九八七 「後期古墳出土の鉄鍬について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集V』 五七—八五頁など。

⑦ 杉山秀宏 一九八八 「古墳時代の鉄鍬について」『橿原考古学研究所論集』第八 五二—九一—六四頁。

⑧ 尾上元規 一九九三 「古墳時代鉄鍬の地域性——長頸式鉄鍬出現以降の西日本を中心として——」(前掲)。水野敏典 一九九三 「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬」『古墳』第九六号 七四—一〇四頁。水野敏典 一九九五 「東日本における古墳時代鉄鍬の地域性」(前掲)。豊島直博 二〇〇二 「後期古墳出土鉄鍬の地域性と階層性」『奈良文化財研究所学報第十六号 文化財論叢Ⅲ』 八五—九六頁。大谷宏治 二〇〇四 「東と西の挟間——古墳時代後期の鉄鍬にみる東海・甲信地方の特質」(前掲) など。

⑨ 川西宏幸 一九九〇 「儀仗の矢鏃——古墳時代開始論として——」『考古学雑誌』第七六卷第二号 三六—六二頁。

⑩ 松木武彦 一九九一 「前期古墳副葬鉄鍬の成立と展開」(前掲)。松木武彦 一九九六 「前期古墳副葬鉄鍬の成立過程と構成——雪野山古墳出土鉄・銅鍬の検討によせて——」『雪野山古墳の研究』考察編 三五一—三八四頁。近年それらはまとめられている。松木武彦 二〇〇七 「日本列島の戦争と初期国家形成」。

⑪ 松木武彦 一九九二 「銅鍬の終焉——長法寺南原古墳出土の銅鍬をめぐって——」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究所報告第二冊 一〇一—一六頁。

⑫ 高田健一 一九九七 「古墳時代銅鍬の生産と流通」『待兼山論叢』第三号史学篇 一一—三三頁。

⑬ 野島永 一九九一 「鉄鍬」『権現山五一号墳』 一〇一—一〇四

頁。卜部行弘 一九九六 「金属器」『中山大塚古墳』一六九—一七一頁。佐藤慎・三浦知徳 一九九八 「鉄鍬」『象鼻山一号古墳——

第二次発掘調査の成果——』『養老町埋蔵文化財調査報告第二冊』七二—七七頁。南部裕樹 二〇〇一 「銅鍬・鉄鍬」『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ』前方面副葬品研究編 八七—一〇〇頁。池淵俊一 二〇〇二 「神原神社古墳出土鑿頭式鉄鍬に関する試論」(前掲)。村上恭通 二〇〇三 「大和における古墳副葬鉄鍬の形成——ホケノ山古墳出土品を中心に——」『初期古墳と大和の考古学』 三四—三五〇頁。

⑭ 水野敏典 二〇〇三 「古墳時代中期における鉄鍬の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第一四 二五—二七六頁。鈴木一有 二〇〇三 「中期古墳における副葬鉄鍬の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第一集 四九—七〇頁。

⑮ 中期前半の「短頸式鉄鍬」から中期後半の「長頸式鉄鍬」への移行については連続性を重視する立場と両者の間に一定の隔絶性を認める立場とがある。前者には、小林健一 一九七五 「弓矢と甲冑の変遷」『古代史発掘』第六卷 九八—一〇二頁。田中晋作 一九九一 「古市古墳群・百舌鳥古墳群の鉄鍬」『厩塚 鞍塚 珠塚塚』 二二—二四七頁がある。後者には、鈴木一有 二〇〇二 「鉄製武器・武器における型式学的研究の視座」『考古学における認識と実測』 一一—二三頁などがある。

⑯ 水野敏典 二〇〇三 「古墳時代中期における日韓鉄鍬の一樣相」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第一集 七一—八〇頁。水野敏典 二〇〇三 「日韓鉄鍬に見る相對年代観——古墳時代中期を中心として——」『新世紀の考古学——大塚初重先生喜寿記念論文集——』 三八—四〇〇頁。水野敏典 二〇〇七 「古墳時代鉄鍬研究の諸問題——東アジアの中の鉄鍬様式の展開——」『古代武器研究』第八号 三九—五一頁。

⑰ 杉山が依拠した古墳または他の副葬品の年代観については、註における表で示されているのみで、詳細はやや判然としない点が多い。表中の「仿製鏡」がいわゆる「仿製三角縁神獸鏡」を示すのか、他の「仿製鏡」も含めるのかは不明である。仿製三角縁神獸鏡の製作に先立って他の仿製鏡の製作が開始されたとする理解がより整合性を増している現況からすれば、この不鮮明さには大きな問題が残る。また、鋳留技法の導入が須恵器TK七三型式に先立って位置づけられている点が多い。

⑱ 尾上元規 一九九三 「古墳時代鉄鍬の地域性——長頸式鉄鍬出現以降の西日本を中心として——」（前掲）など。杉山秀宏 一九八八 「古墳時代の鉄鍬について」（前掲）ではさらに地域性の発露に軍事的・政治的背景を強調する。

⑲ 単一の器物の変遷と消長から年代を論じるにあたり、あらかじめ前

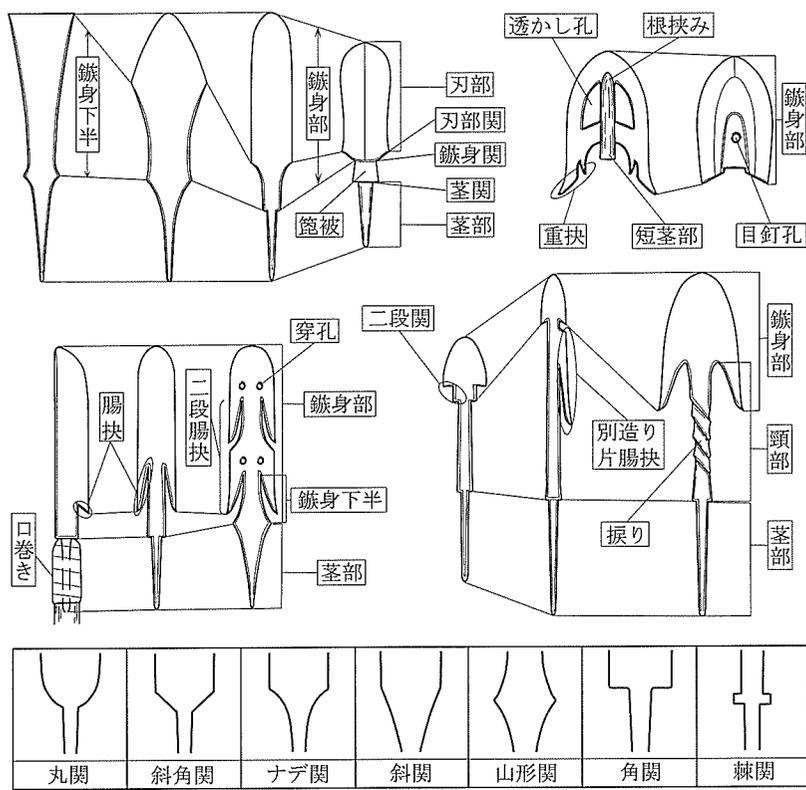
第二章 分 類

1 部分名称と用語の設定

鍬の分類が共通の見解に達していないというのは、研究史において繰り返し指摘されてきた事実である。そして同時に鍬の部分名称についても、論者により振幅を認めることができる。これは対象とする時期が広くなるにつれ顕在化する問題であり、より総合的で齟齬をきたさない用語体系が求められているといえる。そこで分類に先立ち鍬の部分名称について整理をおこなう。第1図に本稿で用いる部分名称を示す。

第1図中で「頸部」として表記した、いわゆる短頸式鉄鍬や長頸式鉄鍬にみられる鍬身部と茎部なかの間の軸状部につい

提として「前期から中期」という古墳時代の時期区分の概念を採用することは論理的に不整合の感は否めない。しかし先行研究によって位置づけがなされてきた前・中・後という三時期区分の見解に賛同するため、便宜的な理由によりこれらの概念を用いる（小林行雄 一九六一「中期古墳時代文化とその伝播」「古墳時代の研究」二二五—二六〇頁）。また本稿はあくまで鍬という単一の器物を検討の対象とするため、古墳時代前期から中期という時間幅を松木武彦による「有稜系」の出現から、深い脇たは扶たを持つ長頸片刃式鉄鍬（本稿における長頸C式）の主體的な副葬終了という時間幅に置き換えて理解し、それらを検討の対象とする（松木武彦 二〇〇七 「日本列島の戦争と初期国家形成」（前掲）。中期の時間幅は、橋本達也 二〇〇五 「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論——松林山古墳と津堂城山古墳から——」（『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』五三九—五五六頁による）。



第1図 部分名称と関名称

ては、頸部の用語が定着しつつあると考ええる。しかし、第1図中において「鍬身下半」とした部位についても、頸部として表記する場合が多い。本稿では原則として「典型的な」短頸式鉄鍬や長頸式鉄鍬とその系譜上にあると考える類例が有する直線的な軸状部のみに限定して「頸部」の語を用いる。そのような「頸部」とは異なる、刃部と莖部間の部位については、鍬身の一部であるとする考えに立つ。その上で鍬身中の刃部ではない箇所を指す語として「鍬身下半」の語を定義し用いることとする。^①

また「莖被」の語は研究史上「頸部」と同様の部位を指す語として用いられる場合もみられるが、本稿ではより限定的に用いるものとする。すなわち鍬身部・莖部と明確な境界を持って付随する、平面形が台形を、横断面形が円形をなす、

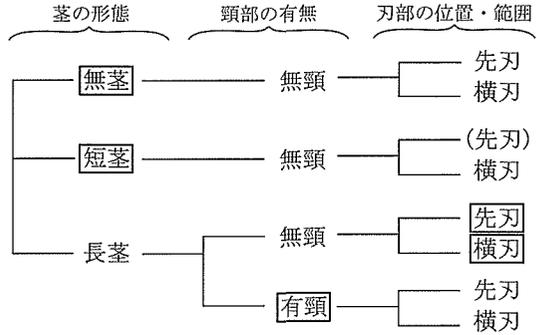
円錐台形の部位についてのみその語を用いる。篋被については鍔身下半や頸部とは異なった位置づけが可能であり、より限定的・区別的にその評価をするべきと考える。

2 分類の前提

松木武彦は鍔の分類の一次レベルにおいては機能差を重視するべきと主張する^②。鍔身形態や鍔身部の大小に加え、その副葬状況の差異に鍔の機能分化を想定したことは、弥生時代の鉄鍔・銅鍔と古墳時代のそれとの隔絶性を明確にし、古墳副葬鍔の特質を理解する上で一つの重要な視点を開いたものである。しかし、あらかじめ鍔の機能を限定して論を展開することは、同一系譜の鍔の變遷過程における、機能の変化や付与といった起こりうるべき事態を、前提として否定するものであり、必ずしも適切な姿勢ではないと考える。異なった機能を有するとみられる例が混合されて理解・評価されることが問題なのであり、その混入を排除できる分類であれば必ずしも松木が述べるように機能差を分類の一次レベルに限定する必要はないと考える。よって本稿では、機能差を反映したとみられるおおよそ大型・小型といった差異に基づく分類を一次レベルとしては位置づけない^③。

また、前提として鉄鍔・銅鍔を分離して分類をおこなうことはせず、両者を包括しうる分類案の提示を目指す^④。鉄・銅という素材の違いは鍛造や鑿切り抜きと鑄造という製作技法の違いに帰着するが、鉄鍔・銅鍔の両者に共通の形態的特徴を示す類例は多い。鉄・銅という素材の違いを超えて同一の形態を志向するような動きが存在したことがわかる。そのため形態の變遷から編年をおこなうことを目的とする分類においては、両者は一括して扱われるべきと考えるからである。

水野敏典は鍔の分類の一次レベルにおいて、鍔と矢柄との装着方法に着目した^⑤。根挟みを用いるか否かという矢柄の装着方法の差異は、矢としての製作段階における強烈な個性であり、また、鍔身部の形態そのものを強く規定する要素といえる^⑥。そのため本稿では水野の考えにならない、分類の一次レベルとして茎の形態を設定し、続いて頸部の有無による分類

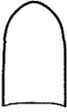
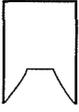


第2図 分類構造模式図

をおこなう。さらに現実的な資料形態数の多寡を考慮し、その下位分類として刃部の位置・範囲を設定する。

つまり、一次レベルとして、茎を持たない「無茎式」、短小で扁平な茎を持つ「短茎式」、細長い茎を持つ「長茎式」に分類する。続いて二次レベルとして、頸部の有無により分類をおこなうが、長茎式を除く他の例は頸部を持たないため細分はおこなえない。長茎式は頸部を持たない「無頸式」と頸部を持つ「有頸式」に分類する。さらに三次レベルとして、刃部の位置・範囲に基づき細分をおこなう。刃部が鎌身部の先端にある「先刃式」と刃部が鎌身部の側縁にまでおよぶ「横刃式」に分類する。分類構造の模式図を第2図にあげる。

このようにしておこなう階層的な分類により、大きく八種へと分類することができる。しかし、無茎式・短茎式と長茎式のうち有頸式については、実際の類例数が限られるため、さしあたり刃部の位置・範囲による分類は留保し、それぞれ無茎式・短茎式・有頸式としてまとめておく。すなわち、大別としては、「無茎式」「短茎式」「先刃式」「横刃式」「有頸式」の五種を有効とし、これらを大形式として設定する。さらに、これら各大形式について、それぞれ鎌身形態や大きさにまとまりのみられる一群として、形式へと細分する。形式はさらに各種の要素により型式に細分する。論を先取りすれば、型式は同一形式内における時間的差異をあらわすものである。その位置づけの妥当性の検証はのちにおこなう。形式・型式細分にあたっては、大形式の分類のように明確な階層性を設けていない。また、各形式・型式の分類要素はそれぞれ異なり、一貫したものではない。これは、階層性の徹底や分類基準の画一化が、必ずしも鎌の分類・編年にあたって有効ではないと研究史上判断したためである。

無茎三角 A	 <p>鍔身部が三角形をなす無茎式鍔のうち、鍔身部下端が直線となる一群。 (兵庫県西求女塚副室、京都府園部垣内)</p>	無茎圭頭	 <p>鍔身部が先刃式鍔の圭頭 a 式と同様の形態をなす無茎式鍔。 (岡山県浦間茶白山、兵庫県御旅山 3 号)</p>
無茎三角 B	 <p>鍔身部が三角形をなす無茎式鍔のうち、鍔身部下端に腸袂を持つ一群。 (福島県会津大塚山北棺、大阪府庭島塚)</p>	無茎一段	 <p>鍔身部の中位に段差を持ち、上下二段にわかれるもの。 (静岡県堂山埴輪棺、広島県亀山 1 号)</p>
無茎四角	 <p>鍔身部が方形をなす無茎式鍔。 (岡山県浦間茶白山、愛知県東之宮)</p>		

第 3 図 無茎式鍔の分類

個々の鍔は「定角 A 1 式」のように「名称+アルファベット+数字」によってあらわす。「名称+アルファベット」により形式を、「数字」により型式をあらわす。ただし、この「名称+アルファベット」については、便宜上個々の資料を指示するのに十分で、かつ最も簡便と考える語を採用した。また、鉄・銅という素材の差異については、その差異に関して論及する必要性を認める場合や実際に個々の資料について言及する場合には「圭頭 A 式鉄鍔」や「定角 A 4 式銅鍔」として付記する。

3 分 類

右記の五大形式の各形式・型式について論述する。形式・型式分類の模式図については各図中に表記した。あわせてそれぞれについて分類基準と主な出土古墳を表記している。なお、模式図においては刃部範囲を太線で表現した。

a 無 茎 式 (第 3 図)

頸部・茎部を持たず、鍔身部のみで構成される一群である。矢柄との接合のための「アダプター」として、別部材である根挟みを用いたり、竹や木製の矢柄の先端を半裁して鍔身部を挟み込むことで、矢柄との接合をおこなう。

鍔身部の形態差に基づき、無茎三角 A 式・B 式、無茎四角式、無茎圭

短茎長三角 A		鍬身部が長三角形をなし、深い腸袂を持つ短茎式鍬のうち、腸袂端部付近に屈曲点を持つもの。 (京都府椿井大塚山、大阪府紫金山)	短茎三角 A		鍬身部が三角形をなすもののうち、重袂を持たない短茎式鍬。 (大阪府紫金山、京都府宇治二子山南)
短茎長三角 B		長三角形の鍬身部に深い腸袂を持つ短茎式鍬のうち腸袂端部に屈曲点のないもの。 (奈良県ホケノ山、大阪府紫金山)	短茎三角 B		鍬身部が三角形をなすもののうち、重袂を持つ短茎式鍬。 (岡山県金蔵山副室、福井県天神山7号第1施設)
短茎長三角 C		長三角形の鍬身部に深い腸袂を持つ短茎式鍬のうち重袂を持つもの。 (栃木県山王寺大柵塚、岡山県金蔵山副室)	短茎四角		鍬身部が方形の短茎式鍬。 (岡山県金蔵山副室、奈良県五條猫塚石室外)
短茎長三角 D		長三角形の鍬身部にかえりの浅い腸袂を持つもの。または、かえりのまったく無いもの。 (静岡県千人塚後円部、奈良県五條猫塚石室外)			

第4図 短茎式鍬の分類

頭式、無茎二段式の五形式に分類する。無茎三角 A 式・B 式には大小の差が顕著な類例もあるが、さしあたり細分はおこなわない。

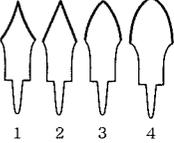
b 短茎式(第4図)

短小で扁平な短茎部と鍬身部からなる一群である。短茎部はそのままでは矢柄に挿入した際に十分な固定効果を期待し難い形態をなしている。そのため、無茎式と同様に根袂みを用いたり、あるいは半裁した矢柄の先端で鍬身部を挟み込むことで、矢柄との接合をおこなう。

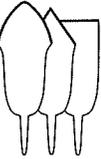
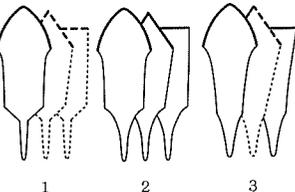
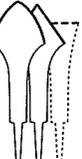
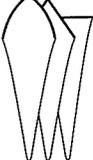
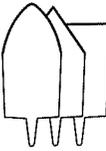
鍬身部と腸袂^{わたう}の形態差から、短茎長三角 A・D 式、短茎三角 A 式・B 式、短茎四角式の七形式に分類する。短茎長三角 B 式・C 式・D 式には大小の差が顕著な類例も認められるが、さしあたり分類はおこなわない。

c 先刃式(第5図、第6図)

矢柄に挿入することで十分な固定効果が期待できる長い茎を持ち、鍬身部の先端に刃部を有するものならびにその系譜に属すると考えられる一群である。

<p>定角 A</p>		<p>鍬身部の先端におおよそ1.0cm以上の三角形の刃部を持つ一群。刃部および刃部関の形態により4型式に細分する。</p> <p>1 型式：刃部が内湾するもの。 (千葉県神門4号、福岡県津古生掛)</p> <p>2 型式：刃部が直線をなすもの。 (広島県石鏡山1号第1号主体部 滋賀県雪野山)</p> <p>3 型式：刃部がわずかに膨らむもの。刃部関の張りは弱い。 (静岡県三池平、京都府平尾城山石櫛)</p> <p>4 型式：刃部が強く膨らみ、刃部関の張りの強いもの。 (大阪府北玉山、福岡県潜塚2号棺)</p>
<p>定角 B</p>		<p>鍬身部の先端におおよそ1.0cm以上の刃部を持つ一群のうち、刃部側面がS字カーブを描くもの。</p>
<p>定角 C</p>	 <p>ふくらみのある曲線的な三角形の刃部を持つ長身のもの。 (大阪府紫金山、 宮崎県島内35号)</p>	<p>方頭 A</p>  <p>鍬身部の先端に横一文字の刃部を持つもののうち、鍬身部側面が一直線となるもの。 (奈良県黒塚、 静岡県新豊院山D2号)</p>
<p>圭頭 A</p>	 <p>鍬身部の先端に1.0cm未満の三角形の刃部を持つもののうち、刃部関が明確に認められるもの。 (福岡県津古生掛、 広島県石鏡山1号第2号主体部)</p>	<p>方頭 B</p>  <p>鍬身部の先端に横一文字の刃部を持つもののうち、鍬身部の中位で幅が最大となるもの。 (島根県神原神社、大阪府紫金山)</p>
<p>圭頭 B</p>	 <p>鍬身部の先端に1.0cm未満の三角形の刃部を持つもののうち、明確な刃部関を持たないもの。 (愛媛県朝日谷2号、 岐阜県象鼻山1号)</p>	<p>方頭 C</p>  <p>鍬身部の先端に横一文字の刃部を持つもののうち、長身のもの。 (京都府園部垣内、 山口県天神山1号)</p>
<p>圭頭 C</p>	 <p>ふくらみがない直線的な三角形の刃部を持つ、長身のもの。 (京都府瓦谷1号第1主体、 岡山県金藏山副室)</p>	<p>円柱</p>  <p>鍬身下半の横断面形が円形をなすもの。刃部平面形は三角形となるが、刃部横断面形は三角形または四角形となる。 (佐賀県西一本杉ST009、 兵庫県松田山)</p>

第5図 先刃式鍬の分類(1)

大型定角・圭頭・方頭 A	 <p>鎌身部の先端に刃部を持つ大型の一群のうち、茎関が丸関となるもの。 (兵庫県権現山51号(圭頭)、京都府椿井大塚山(方頭))</p>	<p>※大型定角・圭頭・方頭のA～F式については、刃部の形態を除き同様の基準で分類をおこなうため、一括して表記している。模式図の左から大型定角式、大型圭頭式、大型方頭式。なお、今後の出土が想定される形式については破線で示している。出土古墳に続く括弧内には、実際に出土した形式を記載した。</p>
大型定角・圭頭・方頭 B	 <p>鎌身部の先端に刃部を持つ大型の一群のうち、茎関が斜行するもの。茎関の形態により3型式に細分する。</p> <p>1 型式：茎関が斜角関となるもの。 (香川県丸井(定角)、徳島県西山谷(定角))</p> <p>2 型式：茎関がナデ関となるもの。 (京都府寺戸大塚前方部(定角)、大阪府北玉山(方頭))</p> <p>3 型式：茎関が斜関となるもの。 (京都府愛宕山(定角)、奈良県タニグチ1号(方頭))</p>	
大型定角・圭頭・方頭 C	 <p>鎌身部の先端に刃部を持つ大型の一群のうち、茎関が山形関となるもの。 (奈良県五條猫塚埴輪下(定角)、静岡県各和金塚(圭頭))</p>	大型定角・圭頭・方頭 E
大型定角・圭頭・方頭 D	 <p>鎌身部の先端に刃部を持つ大型の一群のうち、鎌身下半が著しくすぼまり、茎関が角関となるもの。 (奈良県後出2号(定角)、愛知県経ヶ峰1号(方頭))</p>	大型定角・圭頭・方頭 F
		 <p>鎌身部の先端に刃部を持つ大型の一群のうち、明確な茎関を持たずに茎に至るもの。 (福岡県老司3号石室(定角・圭頭)、静岡県各和金塚(圭頭))</p>
		 <p>鎌身部の先端に刃部を持つ大型の一群のうち、鎌身下半で幅を減じずに角関の茎関に至るもの。 (山口県国森(方頭)、京都府椿井大塚山(定角・圭頭))</p>

第6図 先刃式鎌の分類(2)

大小による差異と刃部の形態に基づき、分類をおこなう。おおむね二・五cm以上の鎌身幅を持つものを大型とする。定角A～C式、圭頭A～C式、方頭A～C式、円柱式、大型定角A～F式、大型圭頭A～F式、大型方頭A～F式の二八形式に分類する。なお、大型定角式、大型圭頭式、大型方頭式の諸形式については、刃部の形態による形式区分を超越して、関の形態差により同様の基準に基づき細分するため、一括し

柳葉A		鐮身部側縁に直線的な刃部を持ち、そのまま茎関に至るもののうち、茎関が丸関のもの。 (兵庫県森尾、奈良県城山2号)	柳葉E		鐮身部側縁の刃部と茎関がS字カーブを描く一群のうち、鐮身部上半で鐮身部幅が最大となるもの。最も典型的な柳葉式銅鐮。 (岡山県浦岡茶白山、奈良県メスリ山)
柳葉B		鐮身部側縁に直線的な刃部を持ち、そのまま茎関に至るもののうち、茎関がナデ関のもの。 (奈良県黒塚、静岡県三池平)	柳葉F		鐮身部側縁の刃部と茎関がS字カーブを描く一群のうち、鐮身部下半で鐮身部幅が最大となるもの。 (岡山県月の輪、徳島県大代)
柳葉C		鐮身部側縁にS字カーブを描く刃部を持ち、山形関を経て茎部へと至るもの。いわゆる鳥舌鐮。 (徳島県大代、福岡県月岡)	柳葉G		鐮身部側縁に直線的な刃部を持ち、鐮身下半を持たずに角関となる茎関に至るもの。 (奈良県新沢500号、大阪府和泉黄金塚西櫛)
柳葉D		鐮身部側縁に直線的な刃部を持ち、鐮身下半から角関を経て茎関に至るもの。 1 型式：鐮身長10cm未満のもの。 (京都府ニゴレ、東京都野毛大塚第3主体) 2 型式：鐮身長10cm以上のもの。 (京都府カヤガ谷2号)	柳葉H		幅が狭い鐮身部に直線的な刃部を持つもの。 (奈良県富雄丸山1号、奈良県佐味田宝塚)
大型柳葉A		鐮身部側縁に刃部を持ち、鐮身部長6.5cm以上の大型の一群のうち、茎関が丸関のもの。 (奈良県中山大塚、大阪府紫金山)	柳葉I		鐮身部両側縁の刃部の長さがそれぞれ異なるもの。刃部関の形態は腸袂やナデ関がある。 (奈良県後出2号、福岡県勝浦10号)
大型柳葉B		鐮身部側縁に刃部を持ち、鐮身部長6.5cm以上の大型の一群のうち、茎関がナデ関のもの。 (滋賀県雪野山、大阪府唐塚)			

第7図 横刃式鐮の分類(1)

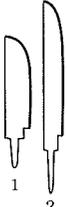
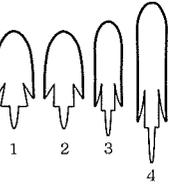
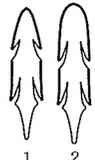
て表記をしている。そのため大型定角式・大型主頭式・大型方頭式を合わせて先刃大型三種と呼称する。^⑧

定角A式は刃部の形状により四型式に、先刃大型三種B式はそれぞれ関部の形状により三型式に細分する。

d 横刃式(第7図、第8図)

矢柄との十分な固定効果が期待できる長い茎を持ち、鐮身部の側縁に刃部を有する一群である。

鐮身部や鐮身関の形態と腸袂の有無により、柳葉AⅠ式、大型柳葉A式・B式、腸袂柳葉AⅠD式、片刃A式・B式の一七形式に分類する。

腸扶柳葉 A	 <p>腸扶を持つ鋸身部と茎部のみからなるもの。筧被を持つものも含む。 (奈良県ホケノ山、福岡県石塚山)</p>	片刃 A	 <p>鋸身部の片側のみに刃部を持つもののうち、鋸身部長が5.0cm程の短身のもの。刃部を持たない背側に段差がある。 (滋賀県安土瓢箪山中央石櫛、大阪府壺井八幡宮蔵)</p>
腸扶柳葉 B	 <p>腸扶を持つ鋸身部と鋸身下半を持ち、茎関が角関とならないもの。</p> <p>1 型式：茎関が斜関のもの。 (京都府妙見山後円部、奈良県城山 2 号)</p> <p>2 型式：茎関が山形関のもの。 (福岡県老司 4 号石室、東京都野毛大塚第 3 主体)</p>	片刃 B	 <p>鋸身部の片側のみに刃部を持つもののうち、背に段差を持たない長身のもの。</p> <p>1 型式：鋸身部長が5.5cm以上10.0cm未満のもの。 (大阪府盾塚、大阪府鞍塚)</p> <p>2 型式：鋸身部長10.0cm以上のもの。 (東京都御嶽山、福岡県セストノ)</p>
腸扶柳葉 C	腸扶を持つ鋸身部と鋸身下半を持ち、茎関が角関となるもの。		
		<p>1 型式：鋸身部が7.0cm未満、鋸身下半が茎関側で幅広になるもの。腸扶の切り込みは浅い。 (愛知県東之宮、大阪府真名井)</p> <p>2 型式：鋸身部が7.0cm未満で、鋸身下半が方形のもの。 (京都府寺戸大塚前方部、福岡県阿志岐 B 26 号)</p> <p>3 型式：鋸身部が7.0cm以上9.0cm未満で、腸扶の深いもの。 (兵庫県年ノ神 6 号、兵庫県小野王塚)</p> <p>4 型式：鋸身部が9.0cm以上で、腸扶の深いもの。 (岡山県随庵、京都府徳雲寺 6 号第 3 主体)</p>	
腸扶柳葉 D		<p>複数段の腸扶を持つもの。いわゆる二段腸扶鋸。</p> <p>1 型式：鋸身部上段の長さが下段より短いもの。 (大阪府和泉黄金塚中央櫛)</p> <p>2 型式：鋸身部上段の長さが下段以上のもの。三段腸扶のものも含める。 (大阪府盾塚、大阪府アリ山中央施設)</p>	

第 8 図 横刃式鋸の分類 (2)

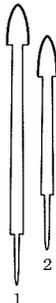
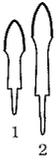
柳葉 D 式を長短の差から二型式に、腸扶柳葉 B 式を関部の形状から二型式に、腸扶柳葉 C 式を関部の形状と長短の差違から四型式に、腸扶柳葉 D 式を鋸身部の形状から二型式に、片刃 B 式を長短の差違から二型式に細分する。

e 有頸式 (第 9 図)

矢柄との十分な固定効果が期待できる長い茎と鋸身部の間に、頸部を持つ一群である。

全体的なプロポーションの差違と、鋸身部の大小に基づき、短頸 A ~ C 式、長頸 A ~ C 式、有頸平根 A ~ C 式の九形式に分類する。

なお、西岡千絵により、短頸鋸と長頸鋸の境界はおおよそ鋸長 (刃部長 + 頸部長) 一〇・〇 cm であるとされている^⑨。本稿でもその見

短頸A	 <p>鐵長（鐵身部長+頸部長）が4.0cmほどの短身のもの。鐵身部は三角形をなす。 （大阪府庭島塚、静岡県赤門上）</p>	 <p>鐵長10.0cm以上で鐵身部が三角形をなすもの。別造り片腸挾を持つものを含める。</p> <p>1 型式：鐵長13.5cm以上のもの。 （京都府西山塚、奈良県後出3号第2主体） 2 型式：鐵長10.0cm以上、13.5cm未満のもの。 （京都府宇治二子山南、香川県川上）</p>
短頸B	 <p>鐵長4.5cm以上で鐵身部が三角形のもの。二段閑を持つものや頸部を振るものもみられる。 （大阪府豊中大塚第2主体、静岡県堂山埴輪植）</p>	
短頸C	 <p>鐵長4.5cm以上で鐵身部が柳葉形をなすもの。鐵身閑に腸挾を持つものも含める。</p> <p>1 型式：鐵長8.0cm未満のもの。 （徳島県大代、大阪府厩塚） 2 型式：鐵長8.0cm以上のもの。 （大阪府鞍塚、奈良県五條猫塚）</p>	 <p>鐵長10.0cm以上で鐵身部が柳葉形をなすもの。別造り片腸挾を持つものを含める。</p> <p>1 型式：鐵長13.5cm以上のもの。 （大阪府珠金塚北櫛、大阪府野中第2列） 2 型式：鐵長10.0cm以上、13.5cm未満のもの。 （奈良県後出3号第1主体、兵庫県龜山副葬品埋納施設）</p>
有頸平根A	 <p>幅広の鐵身部を持つ有頸式のうち、鐵身部が短茎式と同様の形態を呈するもの。頸部に振りや別造り片腸挾を持つ例が多い。 （京都府愛宕山、静岡県五ヶ山B2号）</p>	
有頸平根B	 <p>幅広の鐵身部を持つ有頸式のうち、鐵身部に深い腸挾を持つもの。 （奈良県新沢71号、静岡県石ノ形）</p>	 <p>鐵長10.0cm以上で鐵身部の片側のみに刃部を持つもの。 （東京都御嶽山、静岡県石ノ形）</p>
有頸平根C	 <p>幅広の鐵身部を持つ有頸式のうち、鐵身閑が角閑となり、鐵身部がふくらを持つ三角形となるもの。 （奈良県新沢255号）</p>	

第9図 有頸式鐵の分類

解に従い、鐵長一〇・〇cm未満を短頸式、それ以上を長頸式とする。

短頸C式、長頸A式、長頸B式をそれぞれ長短の差違により一型式に細分する。

① 腸袂柳葉式と呼称される例において、深く切り込んだ腸袂を作出するために、腸袂と莖部の間に形成される軸上の部位については「頸部」の語を用いるのに支障のない形状を有していると考えられることもできる。しかし、後述するように当該例は日本列島内における短頸式鉄

鍔出現以前の類例からその系譜を追求することが可能であり、それについても「頸部」の語を用いることは、用語のより限定的な定義を試みる場合には必ずしも適当ではない。よって腸袂柳葉式の当該部位については、鍔身下半として位置づけをおこなう。

② 松木武彦 一九九一 「前期古墳副葬鍔の成立と展開」(前掲)。

③ さらにいえば、鍔の機能の分化は、ある鍔の「かたち」が存在したうえで、それを大型・小型といったように作り分けることで現出したものであり、先行するのは鍔の「かたち」である。異なった機能を持つとされ作り分けられていたものがのちに「同じかたち」に帰着したのではない。機能差の弁別とその評価は重要な論点であるが、本稿の目的においてはそれを第一義とした分類階層は必ずしも優先しない。

④ 銅鍔と鉄鍔を一括して位置づける理解は松木武彦による(松木武彦

一九九一 「前期古墳副葬鍔の成立と展開」(前掲)。

⑤ 水野敏典 二〇〇三 「古墳時代中期における鉄鍔の分類と編年」(前掲)。

⑥ 矢柄と鍔の固定を目的として鍔身部を挟み込む有機質について、矢柄とは別部材である根挟みであるのか、それとも矢柄の先端そのものであるのかの究極的な確定は資料の遺存状態の問題から不可能な類例が大半を占める。それらの弁別は本稿の目的とするところではないため詳細には立ち入らないが、鍔身部を挟み込む有機質および同部材を便宜上、根挟みと呼称する。

⑦ 鍔の機能差を内包しうる大小に基づく分類は、この形式レベルの差異として位置づける。

⑧ ただしこれは、関の形態差による機械的な分類であり、出土が想定しうる形式は第6図中で破線で示した。

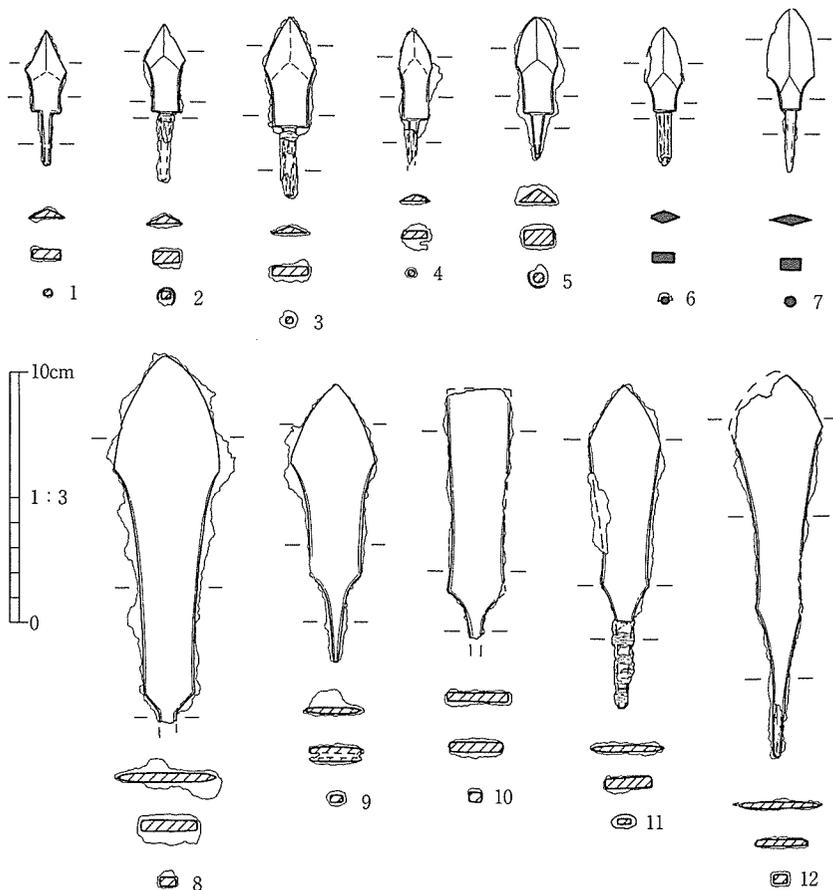
⑨ 西岡千絵 二〇〇五 「計測値からみた短頸鍔と長頸鍔」『古文化談叢』第五三集 四七一―六一頁。

第三章 型式設定の検証と配列

1 型式設定の検証

前章でおこなった分類では、形式内において時間差と考えた差異に型式としての細分を与えた。本章ではそうして設定した型式の妥当性について、相伴遺物の様相から検証をおこなう。^① なお、型式細分にあたっては、先行研究により明らかにされている形式の変遷観を参照した部分も多い。それらについては各形式の段で適宜言及する。

(一定角A式(第10図1~7)) 四型式に細分した。刃部の形態と刃部関の張りの強弱により1式から4式へ、あるいは逆



1 津古生掛 2 宮林 3 雪野山 4 平尾城山石柳 5 三池平 6 北玉山 7 潜塚 8 丸井 9 寺戸大塚前方形 10 北玉山 11 庭島塚 12 愛宕山

第10図 鉄実測図 (1) (S = 1/3、断面黒塗りは銅鉄。他は鉄鉄。)

の連続的変遷が想定できる。鉄鏃においては3式・4式には鏃身関が角関ではなくナデ関となる例が一部認められる。鏃身関の形態にナデ関が認められるようになることを関形態の弛緩と捉えるならば、ナデ関となる類例を含む3式・4式を新相に、ナデ関の類例が認められない1式・2式を古相として理解することが可能である。よって1式↓2式↓3式↓4式という型式学的変遷が想定できる^②。

定角A式を出土し、年代決定の基準となりえる他の遺物を出土した古墳を第1表にあげる。2式は船載三

第1表 定角A式と共伴遺物

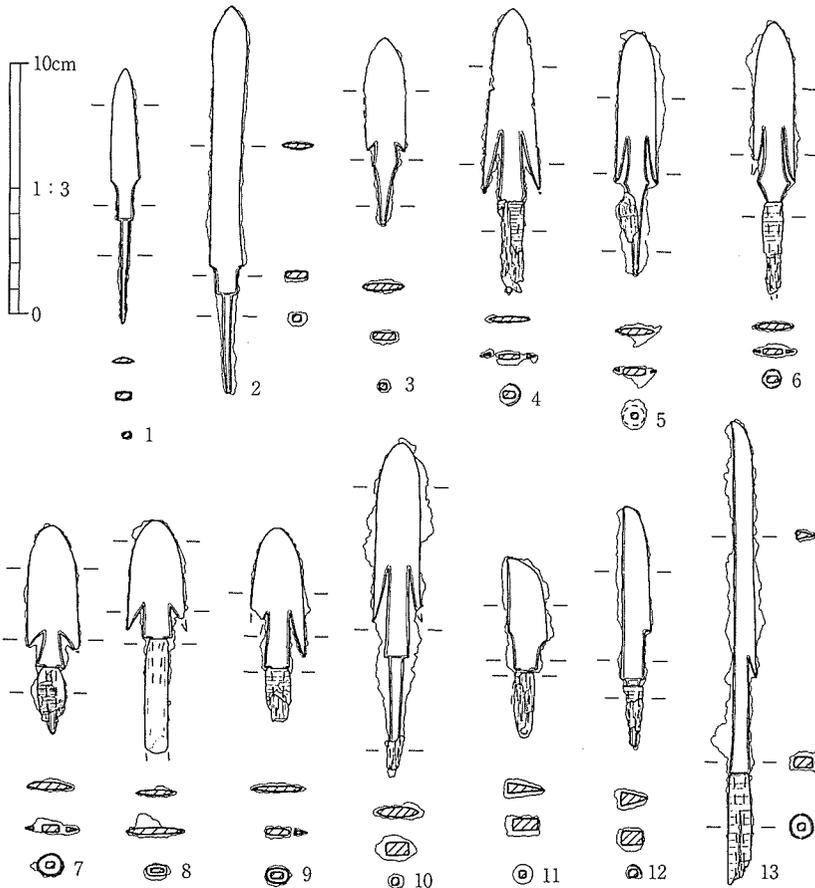
	定角A				三角縁 神獸鏡	仿製三角縁 神獸鏡	倭製鏡	筒形銅器	短甲	その他
	1	2	3	4						
千葉県神門4号	○									
福岡県津古生掛	○	○								
奈良県中山大塚			○							特器
岡山県浦間茶臼山			○							特器
兵庫県権現山51号			○		II III IV					特器
奈良県黒塚			○		I II III IV					
滋賀県雪野山	○	○	○		II IV		I			
京都府椿井大塚山		○	○		I II III IV					
広島県大迫山			○					A		
大阪府真名井			○		V					
静岡県松林山			○		V		II		長革?	
京都府平尾城山 石櫛			○				III			
山口県長光寺山 西石櫛			○			II-a		A		
静岡県三池平			○	○			II III?	A2		
大阪府磐金山			○	○	IV	I-a I-c II-a	III	A	豎革	
神奈川県真土大塚山 主櫛			○	○	IV					
大阪府庭島塚			○	○	III			A		
京都府妙見山 後円部			○	○				B		
京都府寺戸大塚 前方部				○		I-c	III			
滋賀県安土瓢箪山 中央石櫛			○				III	A2	方革B	
奈良県佐味田宝塚			○		I II III IV V	I-c	II III V			
茨城県常陸孤塚				○						方革一

角縁神獸鏡や特殊器台形埴輪との共伴がみられ、3式は三角縁神獸鏡のうちV段階の資料との共伴がみられる。4式は仿製三角縁神獸鏡や筒形銅器といった古墳時代前期でも新相を示す遺物との共伴がみられる。1式は良好な共伴遺物に乏しいが、1式を出土した福岡県津古生掛古墳や千葉県神門4号墳は庄内式併行期に位置づけられており古相を示すといえる。よって1式から4式への変遷と共伴遺物の新古関係の一致を認めうる。^③

(先刃大型三種(大型定角・大型圭頭・大型方頭) B式(第10図8~12)) 大型定角・大型圭頭・大型方頭式については刃部の形状を除き高い相関性を認めるため合せて検討をおこなう。茎関の形態により三型式に細分した。斜角関、ナデ関、斜関は一連の形態変化として想定しようと考え。斜角関は角をもつて鍔身部―茎関―茎部を明確に区分するが、鍔身関から茎部に至る部位の角を省略し、明確な段差を設けずに曲線的で急激な内湾のみによって茎関を作り出したものをナデ関と考えることができる。そして、ナデ関からさらに茎関の内湾が弱まったものが斜関であると考えられる。これらを一連の関形態の簡略化として理解するならば、斜角関(1式)

第2表 大形定角B式と共伴遺物

	大型定角B			三角縁神獸鏡	仿製三角縁神獸鏡	倭製鏡	筒形銅器
	1	2	3				
香川県丸井 第1石室	○						
徳島県西山谷	○						
京都府寺戸大塚 前方部		○			I-c	III	
大阪府紫金山		○		IV	I-a I-c II-a	III	A
滋賀県北谷11号		○				III	
大阪府庭島塚			○	III			A
京都府愛宕山			○			III IV	



1 土師の里8号 2 カヤガ谷2号 3 妙見山後円部 4 島内35号 5 野毛大塚 6 老司4号石室 7 真名井 8 寺戸大塚前方部 9 会津大塚山北棺 10 野中第2列 11 安土瓢箪山 12 盾塚 13 セストノ第11図 鍔実測図(2) (S=1/3)

第3表 腸扶柳葉C式と共伴遺物

	腸扶柳葉C				三角縁 神獸鏡	仿製三角縁 神獸鏡	倭製鏡	短甲
	1	2	3	4				
大阪府真名井	○				V			
愛知県東之宮	○	○			V		II	
福島県会津大塚山 南棺	○					I-b	III	
京都府寺戸大塚 前方部		○				I-c	III	
大阪府盾塚		○	○				III	長革 三革
兵庫県年ノ神6号			○					三革
兵庫県茶すり山 第1主体			○				IV V	長革 三革襟
兵庫県小野王塚			○				III	長革 三銚
大阪府野中 第2列			○					三銚?
大阪府豊中孤塚 西櫛				○				三銚
岡山県陶庵				○				三銚

↓ナデ関(2式) ↓斜関(3式) という変遷が想定できる。

先刃大型三種B式のうち、唯一全型式を出土している大型定角B式について検討をおこなう。大型定角B式を出土した古墳と共伴遺物を第2表に示す。1式とした斜角関の類例は庄内式併行期である香川県丸井古墳や徳島県西山谷古墳から出土している。2式は紫金山古墳や京都府愛宕山古墳でIV期の倭製鏡と共伴する。1式から3式への変遷と共伴遺物の相関を認めようと考える。なお、奈良県タニグチ一号墳では、大型方頭B3式が出土しているが、最新段階に位置づけられる方形板革綴短甲と共伴しており、3式の後出を追認できる。

〔柳葉D式(第11図1・2)〕 鍔身部の長短により二型式に細分した。

1式は大阪府和泉黄金塚古墳東櫛で三角板革綴短甲と三角板革綴衝角付冑と共伴し、大阪府鞍塚古墳で三角板革綴短甲と三角板鍔留衝角付冑と共伴する。2式は大阪府野中古墳第二列で鍔留短甲と共伴する。他の出土古墳においても1式は革綴短甲と、2式は鍔留短甲との共伴が多く認められ、1式と2式は新古関係として認めうる。

〔腸扶柳葉B式(第11図3~6)〕 鍔身関が斜関の1式と山形関の2式に細分した。

2式は腸扶が細く鋭く切り込まれる例のみで占められており、腸扶の切り込みの深さや細密さを鉄器加工技術の進歩と捉えるならば、腸扶切り込みの弱い類例が認められる1式を古相に、腸扶切り込みが強い類例のみで占められる2式を新相に位置づけることができる。

1式は大阪府庭島塚古墳では舶載三角縁神獸鏡や筒形銅器A式と、京都府妙見山古墳後円部東副櫛でB式の筒形銅器との共伴がみられる。2式は大阪府堂山一号墳や兵庫県年ノ神六号墳において三角板革綴短甲と共伴する。1式から2式への変遷と共伴遺物の相関を認める。

〔腸扶柳葉C式（第11図7～10）〕 鍔身部長と腸扶の切り込みの強さならびに鍔身下半の形態により四型式に細分した。

1式・2式は鍔身部幅が幅広で腸扶の切り込みが弱いという点で共通した特徴が認められる。一方3式は鍔身部が細長く、腸扶の切り込みもより細密で深い。4式は3式からさらに鍔身部が長身化した形態として理解できる。また、1式は鍔身下半が末広がりとなっており、2式・3式・4式とは異なる特徴を示す。以上のことから形態的な近似性を考えると1式↓2式↓3式↓4式ないしその逆の変遷が想定できる。3式や4式は腸扶の切り込みが強く、また鍔身部がやや厚手になる例が多いが、それらの点を鉄器加工技術の進歩と考えるならば、1式を最も古式とし4式を最も新式として位置づけることができる。

腸扶柳葉C式を出土し、良好な共伴遺物の認められる古墳を第3表にあげる。1式は愛知県東之宮古墳や大阪府真名井古墳において舶載三角縁神獸鏡のうち最新段階のV段階の資料と共伴する。2式は福島県会津大塚山古墳南棺や寺戸大塚古墳前方部において仿製三角縁神獸鏡と共伴する。3式は盾塚古墳や年ノ神六号墳で三角板革綴短甲と共伴する。4式は岡山県随庵古墳で三角板鍔留短甲や横矧板鍔留衝角付冑と共伴する。1式から4式への変遷と遺物相の対応が認められる。^④

〔腸扶柳葉D式〕 鈴木一有により詳細な分析がおこなわれているが、型式学的な連続性を想定することができ、かつ一定以上の資料数の出土が確認できる二型式への細分にとどめた。1式には腸扶の切り込みが弱い類例がみられることから、1式を古相とし、2式へと変遷したことが想定できる。1式は和泉黄金塚古墳中央櫛で石製腕飾類と、2式は奈良県五條猫塚古墳石室内で小札鍔留眉庇付冑と共伴しており、鈴木による位置づけの妥当性が追認できる。

〔片刃B式（第11図12・13）〕 鍔身部の長短により二型式に細分した。形態的特徴からは変化の方向を想定し難い。

1式は岐阜県龍門寺一号墳や盾塚古墳において長方板革綴短甲や三角板革綴短甲と共伴する。2式は東京都御嶽山古墳や福岡県セストノ古墳において横矧板鉄留短甲と共伴する。1式から2式への変遷を認める。

〔短頸式・長頸式〕 水野敏典、鈴木一有、西岡千絵らにより短頸式、長頸式の変遷は詳述されているため詳細な検証は省略する。短頸式の長身化傾向と、短頸式と長頸式の移行期における著しい長身をなす長頸式の出現ならびにその漸次的短身化傾向は追認しうると考える。

2 配列と段階設定

前節では年代差を反映する分類として型式細分をおこなった形式について、その妥当性を共伴遺物相の変遷から検証した。本節ではそれらの形式について、相互の共伴関係から組成の変遷を整理し、段階設定をおこなう。作業には次の手順をとる。

まずは型式細分をおこないえた形式のうち、細かな分類をおこない、かつ出土古墳数が多く確認できる形式として定角A式と腸扶柳葉C式を認め、配列における優位形式として設定する。続いて定角A式または腸扶柳葉C式と、他の型式細分が可能な形式の鏃が共伴した古墳をピックアップし、複数の形式中における型式配列が「できるかぎり」整合的になるように配列する。次に型式細分が可能な単一の形式を出土した古墳をそれらの古墳配列の間に位置づける。ただし、単一形式のみにより位置づけを与えた古墳については括弧付きで表記することとする。そうして得られた配列結果を第4表に示す。あわせて各古墳から出土した共伴遺物をあげる。

また右記の作業により得られた配列結果によって、型式細分をおこないえなかった各形式についても、それを出土した複数の古墳の配列表上の位置づけから、その形式が副葬された時間幅を想定することができる。こうして想定できる各形式の副葬段階における存続時間幅によって、理論上ある時間軸上の定点において存在している形式すべてを把握すること

が可能となる。この「ある時間軸上の定点において存在している形式すべて」を指す語として「全体組成」の語を定義し、使用する。また、全体組成の対概念として、「個々の古墳において実際に確認できる組成」を指す語として「個別組成」の語を用いることとする。

一方、この配列をもとにして、鍬の生産や流通といった諸問題を追究するには、ある程度の妥当性を持った段階設定が作業上必須となる。また、複数の形式において消滅や出現といった現象が非常に短い時間幅の中で発生している事態を想定しえた場合、同一の背景の中でその画期の解釈を試みることは無意味ではないと考える。以上の理由により鍬変遷の段階設定をおこなう。

段階設定にあたっては型式変化よりも形式の出現・消滅を画期の認定に際しての優先事項とする。また、作業手順上当然のことであるが、ここで設定する段階はあくまで副葬鍬セットの段階であり、鍬製作の変遷段階を直接示すものではない。ただし、製作から副葬に至るまでの流れを明らかにしようと試みる場合、ある段階に製作されたと考えられる特徴的な鍬が、より新しい段階に「例外的に」認められるような事例を明確化しておく意義は大きいと考える。伝世や長期保有といった現象を抽出しうる可能性もある。それらの例については、今後個別の検討が必要となる。

第一の画期として、定角C式・圭頭C式・方頭C式や柳葉F式・G式・H式、腸扶柳葉B式・C式の出現をあげる。第二の画期として、柳葉D式、腸扶柳葉D式、片刃B式、短頸B式・C式の出現をあげる。先行研究において短頸鍬や鳥舌鍬、二段腸扶鍬といった一群の導入期として中期開始の指標の一つともされてきた段階である。第三の画期として、長頸式の出現をあげる。これについても先行研究が詳しいが、導入期の長頸A式・B式は先行する短頸式との隔絶性が著しい。また、長頸式の導入とともに短茎長三角B式が衰退し、他形式の型式変化とも良好に対応する。

以上の三つの画期によって弁別される段階をⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期とする。各期における諸形式の消長を第5表に示す。紙幅の関係で詳細は記さないが、各形式の消長はそれぞれの同伴関係に基づき設定されたものである。

古墳配列

三角縁神獸鏡	仿製三角縁神獸鏡	倭製鏡	鍬形石	筒形銅器	短甲	その他	
II III IV II IV I II III IV V V IV III IV	I-a I-b II-a I-c	I II II III? III III IV 中 中 III 中	1 2 1 2 3 4 4	A A B B	堅革 長革 三革 長革 三革 三革 三革 三革 三革 三鍬 長革 三鍬 横鍬 長革 横鍬 三鍬 横鍬 横鍬 横鍬	特器 特器	津古生 浦間茶 権現山 雪野山 椿井大 真名井 東之宮 三池平 紫金山 庭鳥塚 妙見山 寺戸大 丸山1 石山 和泉黄 盾塚 年ノ神 鞍塚 五條猫 珠金塚 小野王 徳雲寺 宇治二 鶴山 随庵 御嶽山 川上 後出2

表中左側数字は鍬の型式を表す。右側の共伴遺物の略号は注1に表記した。ただし、倭製鏡のうち「中」は中期型の鏡を表す。

第4表 鉢の変遷と

	定角 A	大型定角 B	柳葉 D	腸扶柳葉 B	腸扶柳葉 C	腸扶柳葉 D	片刃 B	短頭 C	長頭 A	長頭 B
(福岡県津古生掛)	1 2									
(岡山県浦岡茶臼山)	2									
(兵庫県権現山51号)	2									
(滋賀県雪野山)	1 2 3									
京都府椿井大塚山	2 3									
大阪府真名井	3				1					
(愛知県東之宮)					1 2					
静岡県三池平	3 4				2					
大阪府紫金山	3 4	3								
大阪府庭島塚	3 4	4		1						
京都府妙見山 後田部	3 4			1						
京都府寺戸大塚 前方部	4	3			2					
兵庫県丸山1号 南櫛		4		1 2						
三重県石山 東櫛				2	2	1				
大阪府和泉黄金塚 東櫛			1			1		1		
大阪府盾塚			1		2	1 2	1	1		
兵庫県年ノ神6号				2	3			1		
大阪府鞍塚			1		3		1	1 2		
奈良県五條猫塚 石室内			1		3		2	1 2		
大阪府珠金塚 北櫛									1	1
兵庫県小野王塚					3			2		2
京都府徳雲寺6号 第3主体						4				1
京都府宇治二子山南									2	1
群馬県鶴山							2	1	2	2
岡山県随庵 中央石櫛						4			2	2
東京都御嶽山							2		2	2
香川県川上									2	2
奈良県後出2号			2			4			2	2

第5表 段階設定と鍔の消長

	I期	II期		III期		IV期	
		古	新	古	新	古	新
無 茎 三 角	A	██████████					
	B	██████████					
無 茎 四 角	A	██████████					
	B	██████████					
無 茎 圭 頭	A	██████████					
	B	██████████					
無 茎 二 段	A	██████████		██████████		██████████	
	B	██████████		██████████		██████████	
短 茎 長 三 角	A	██████████					
	B	██████████					
	C	██████████		██████████			
	D	██████████		██████████			
短 茎 三 角	A	██████████					
	B	██████████					
短 茎 四 角	A	██████████					
	B	██████████					
定 角	A	1	2	3	4		
	B	██████████					
	C	██████████					
	D	██████████					
圭 頭	A	██████████					
	B	██████████					
	C	██████████					
方 頭	A	██████████		██████████			
	B	██████████		██████████			
	C	██████████		██████████			
円 柱 先刃大型三種	A	██████████					
	B	1	2	3			
	C	██████████					
	D	██████████					
	E	██████████					
	F	██████████					
柳 葉	A	██████████					
	B	██████████					
	C	██████████		██████████		██████████	
	D	██████████		1		2	
	E	██████████		██████████			
	F	██████████		██████████			
	G	██████████		██████████			
	H	██████████		██████████			
	I	██████████		██████████			
大型柳葉	A	██████████					
	B	██████████					
腸 袂 柳 葉	A	██████████		██████████			
	B	1	2	3			
	C	1	2	3			
片 刃	A	██████████		1 2		██████████	
	B	██████████		1		2	
短 頭	A	██████████				██████████	
	B	██████████				██████████	
	C	██████████		1 2		1 2	
長 頭	A	██████████				1 2	
	B	██████████				1 2	
	C	██████████				1 2	
有 頭 平 根	A	██████████				██████████	
	B	██████████				██████████	
	C	██████████				██████████	

第四章 各期の様相と意義

1 各期の様相

本節では、前章で設定した各期について概観し、その上で各期における鍬の様相を論述する。

〔Ⅰ期〕 定角A 1式・A 2式、圭頭A式・B式、方頭A式、柳葉A式・E式、腸袂柳葉A式などからなる。短茎長三角式はA式とC式がみられる。定角A 1式の存在や先刃大型三種A式や大型定角B 1式、大型柳葉A式などの認められる段階を相対的に古相とみることが可能であるが、時期的な細分はやや難しい①。

Ⅰ期における全体組成は非常に多くの形式からなっており、個別組成も多彩である。全体組成と個別組成の懸隔も大きい。柳葉E式銅鍬は比較的多くの古墳から出土するが、明確な主要形式の抽出は難しいといえる。

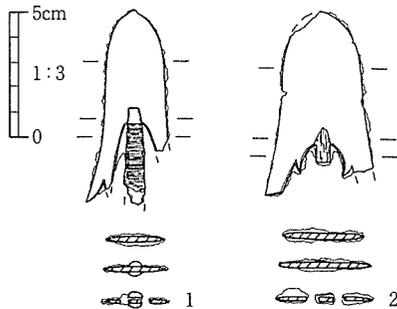
共伴遺物としては舶載三角縁神獸鏡や古相の石製腕飾類があげられる。三角縁神獸鏡副葬以前の段階も含まれる。庄内式併行期から前期前半に相当する。

〔Ⅱ期〕 定角C式・圭頭C式・方頭C式や柳葉F式・G式・H式、腸袂柳葉B式・

C式が採用される段階である。その他の形式についてはⅠ期からの連続性が高い。

また右記の類例に加えて片刃A式や短頸A式、有頸平根A式が採用されるなど、Ⅲ期に継続する様相の萌芽がみられる。定角A 4式のうち、さらに刃部の大型化が進んだ一群や、大型定角B 3式、Ⅲ期につながる要素として柳葉C式や短茎長三角C式(第12図)の出現をもって、新段階を分離することが可能である。

Ⅰ期から消滅した形式は少なく、Ⅱ期の組成のあり様はⅠ期の組成を基礎として



1 山王寺大樹塚 2 北玉山

第12図 Ⅱ期の短茎長三角C式 (S=1/3)

さらに複数の新形式を加えることで形成された組成ということが出来る。結果として全体組成の多様性は拡大され、個別組成も非常に多彩といえる。両者の距離も大きい。

船載三角縁神獸鏡のうち最新のV段階に位置づけられる波文帯鏡群と、それに続く仿製三角縁神獸鏡との共伴がみられる。また、堅矧板革綴短甲・方形板革綴短甲といった鉄製短甲や筒形銅器とも共伴する。前期中葉から前期末に相当する〔Ⅲ期〕柳葉C式・D式、腸袂柳葉B2式・C3式・D式、片刃B1式、短頸B式・C式が組成の主体となり、短茎式には典型的な重袂が採用される。Ⅱ期までにみられた多くの形式が消滅し、銅鍬の副葬も非常に限定的となる。腸袂柳葉D式や短頸C式の細分により、古段階と新段階に細分が可能である。銅鍬の副葬も古段階を示す一要素となる。

全体組成中の形式数が減少し、また、短頸式や柳葉C式など明確な主要形式が出現する。あわせて個別組成もそれぞれ近似したものとなり、結果として全体組成と個別組成が接近する。その一方で、短茎式については鍬身形態や腸袂の形態などの小差を捉えれば、多様性が最も顕在化する段階とすることができ、他形式における画一性の進行とは異なった様相を示す。

主要な共伴遺物として、長方板革綴短甲と三角板革綴短甲、三角板革綴衝角付冑と小札鋌留衝角付冑があげられる。また古段階においては、石製腕飾類や筒形銅器との共伴も認められる。中期初頭から中期中葉に相当する。

〔Ⅳ期〕長頸式が採用され、柳葉D2式や片刃B2式、腸袂柳葉C4式などの非常に長身化の著しい一群が出現する。これらの一群については同時期にみられる出現期の長頸式が著しく長身であることから、「長身化志向」とでもいうべき形態の希求があつたものと考えられる。長頸式の短身化傾向を示す長頸A2式・B2式・C式や有頸平根B式・C式の出現をもって古段階と新段階に区分可能である。

多くの形式が消滅するとともに、長頸式が圧倒的な主要形式としての地位を獲得する。多数の長頸式と少数の短茎長三角D式や有頸平根B式というセットがみられるようになり、鍬のセット関係にも画一性があらわれる。つまり、全体組成

と個別組成が非常に近似したものとなる。また、Ⅲ期段階に特徴的であった短茎式の多様性も認められなくなる。

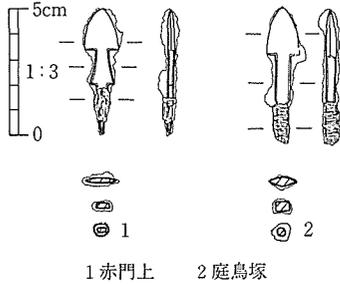
主要な共伴遺物には三角板鋳留短甲や横刃板鋳留短甲、小札鋳留衝角付胄や横刃板鋳留衝角付胄、須恵器TK二一六型式からTK四七型式があげられる。中期後半から中期末に相当する。

2 鋳組成の変遷とその意義

いわゆる有稜系^③の出現をもって前段階と画される古墳時代の鉄鋳・銅鋳組成は、Ⅰ期段階は非常に多様な形態を有し、全体組成と個別組成の差異が顕著であることを特徴とする。さらに、Ⅱ期段階に至って、定角C式・圭頭C式・方頭C式や腸扶柳葉B式・C式などの新形式がⅠ期の組成に覆いかぶさるように採用されることで、全体組成の多様性は極致に達する。多様な鋳形態の存在をそのまま生産地の多元性に直結することは適切ではないが、十字鑄を持つ銅鋳が東日本に偏在し、Ⅰ期段階において定角A式や圭頭A式が瀬戸内中部地域に多くみられるといった傾向は、特定の鋳形式の地域的な生産と流通の可能性を指し示すものである^④。Ⅰ期、Ⅱ期ともに、個別組成に多くのヴァリエーションがみられるという点は、そのような多元的な鋳生産と非広域的な流通状況を背景とすると考えることもできよう。

Ⅲ期に至って鋳組成の主要な位置を占めることとなる短頸B式・C式は、韓半島との関係の中で新たに導入された新形式として評価を受けてきた。しかし、韓半島における短頸式は、鋳身部が柳葉形をなし明確な鋳身関を持たない短頸C式が主流であるのに対し、日本列島内では、短頸A式と同じく、角関という明確な鋳身関を有する短頸B式もまた多く認められるという点には注目する必要がある。短頸C式においても、腸扶を有する例が多い点も韓半島の資料との明確な差異として指摘することができる^⑤。

Ⅱ期段階の短頸A式(第13図)とⅢ期段階の短頸B式は、平面形態のみから判断すれば十分に一連のものとして理解できる。しかし、短頸A式は非常に扁平であり、厚手な短頸B式との間には、製作技法上の差異が想定できる^⑥。平面形態に



第13図 短頸A式 (S=1/3)

みる近似性と側面形態などから想定できる製作技法を、いかに関連させて理解するかは今後の課題であるが、資料数の制約も合わせれば、現状ではその間に順調な連続性を指摘することには慎重であるべきであろう。しかし、そのような短頸A式からの連続性は保留するとしても、日本列島における短頸B式の形態的な独自性の発露は、従来単純に「韓半島からの導入」としてのみ位置づけがなされてきた、短頸鐵導入期の実相について再考を促すものといえよう。すなわち、短頸式の導入には韓半島の鐵鍬形式の影響は大きく認められるものの、その実際上の受容と製作においては列島の工人の主体性と連続性を読み取ることが可能なのである。

Ⅱ期に採用される腸袂柳葉B式やC式といった形式は、型式変化を遂げつつも、Ⅲ期における全体組成の劇的な転換を経てなお生産が継続する。定角C式・圭頭C式・方頭C式についても、Ⅲ期段階にも副葬がみられる。Ⅲ期古段階までは銅鍬の副葬が継続することも含めて、Ⅱ期とⅢ期の鍬形態の間には十分な連続性を認めることができる。その一方で、Ⅱ期と比較して、全体組成と個別組成が接近するという現象を考えるならば、その背景として、鍬の生産体制の画一化と流通機構の広域化の進展を想定することができよう。^⑦

Ⅳ期における鍬組成の転換は、短頸式から長頸式への移行を最大の特徴とするが、他の諸形式の変遷はおおむね型式変化として理解することができる。ここにも前段階からの隔絶性とともに連続性も認めることができる。一方で、長頸式がその出現と共に圧倒的な主要形式としての地位を確立することとなり、結果として全体組成と個別組成がより一層接近する。その背景としては、やはり生産体制の一層の画一化と流通機構の広域化の進展が考えられよう。なお、長頸式の主流化は、Ⅲ期以前にみられたどの鍬と比較してもその速やかさ・広域性ともに群を抜いており、Ⅳ期における生産・流通体制の刷新が、かつてないほどに強力に推し進められたことを示している。

- ① 高田健一は柳葉D式銅鍔のうち先端がより尖った例を古相に位置づける（高田健一 一九九七 「古墳時代銅鍔の生産と流通」〔前掲〕）。
- ② 重挾の出現はⅡ期新段階にみられるが、その形状はⅢ期のものとは異なる。栃木県山王寺大塚古墳例（第12図1）は、腸挾端部が二股に分かれる形態をなしており、腸挾の中間付近に重挾をもうけるⅢ期の「典型的な」重挾とは異なる。大阪府北玉山古墳例（第12図2）は、腸挾端部が鍔の主軸と直交するような角度をなしており、重挾の存在をのぞけば、短葺長三角A式に区分されるべき形態をなしている。両例は相伴する鍔からもⅡ期に位置づけることが妥当であり、重挾の初現例として理解が可能である。しかし、その形態的な差異を勘案し、重挾の一般化はⅢ期とする。
- ③ 松木武彦 一九九一 「前期古墳副葬鍔の成立と展開」〔前掲〕。
- ④ 池淵俊一は前期の鉄鍔についてある程度に対応する製作集団の存在を想定する（池淵俊一 二〇〇二 「神原神社古墳出土鑿頭式

まとめと今後の展望

本稿では古墳時代前期・中期の鉄鍔・銅鍔の分類・編年をおこない、四期、細別七段階としての変遷観を得た。さらに前期中葉以降それぞれの画期において、全体組成と個別組成が段階的に接近するという様相を捉えて、鍔形式の刷新と併行して、その生産体制と流通機構の集約化が段階的に進行していたことを示した。

ここで、定角C式・圭頭C式・方頭C式に着目したい。これら三形式は、Ⅱ期からⅢ期にみられる形式であるが、Ⅱ期においては出土古墳が八古墳九主体部と限定的であるにもかかわらず、紫金山古墳や京都府園部垣内古墳、奈良県富雄丸山古墳などにみられるように、そのうち六古墳において鉄製短甲と相伴する（第6表）。Ⅱ期の鉄製短甲が数量的に限定的な存在であることを考えれば、この相伴率は注目に値する。それらの鉄製短甲は筒形銅器と共に、韓半島との関係の中で

鉄鍔に関する試論」〔前掲〕）。

- ⑤ 日本列島内における短頸C式の出現を、定角A4式や定角B2式にたどることも可能かもしれない。定角A4式のうち、刃部の大型化から、現在最終形態に位置づけうる資料は、福岡県潁塚古墳例（第10図7・銅鍔）であるが、その刃部の大型化は非常に著しく、むしろ古段階の短頸C式との関連を否定させる。定角B2式の佐味田宝塚古墳例（銅鍔）については短頸C式の祖形としての可能性は残る。
- ⑥ 扁平な短頸A式には鉄板くり抜きが、厚手の短頸B式には鍛造による一連の製作が考えられる。
- ⑦ 先述の通り、短葺式については、Ⅲ期において形態のヴァリエーションが最も多様化する。他形式とは異なるこの事象については、生産や流通、あるいは、付与された社会的な機能に別個のあり様が存在したことを示していると考えうる。

第6表 II期における定角C式・圭頭C式・方頭C式出土古墳

古墳名	出土鉄鍬	短甲
石川県雨の宮1号	定角C	方革
京都府園部垣内	圭頭C 方頭C	方革
京都府瓦谷1号 第1主体	圭頭C	方革
京都府瓦谷1号 第2主体	圭頭C	
京都府ヒル塚 第2主体	圭頭C	
大阪府紫金山	定角C	堅革
奈良県鴨都波1号	定角C	方革
奈良県富雄丸山	圭頭C	方革
山口県長光寺山	圭頭C	

前期後半になって導入された器物と考えられる。であるならば、形態からすれば、I期の鍬からの連続性を想定しがたい定角C式・圭頭C式・方頭C式についても、韓半島との関係の中で導入された形式と位置づけることが可能ではないだろう。II期において、鉄製短甲と鉄鍬が同様の背景の中で導入されたのであれば、それはIII期以降にみられる鉄製甲冑の質的・量的拡充や、鍬の全体組成と個別組成の接近にみられる、武装様式の整備に先駆ける動きとして位置づけることができる。古墳時代前期と中期の性格の差異については、このような連続性にも着目する必要がある。また、そのような武装様式の整備・拡充と、本稿で示した生産体制と流通機構の集約化の進展は、一連の現象として評価できるかもしれない。

検討すべき課題は多いが、今後の展望として示したい。

本稿で示しえた理解は、鍬の形態とその組成に基づくものであり、基本的にはその生産と流通のみを主要な論点としたものである。その一方で、「鍬」は本来「矢」の一部品にすぎず、実際には製品としての完成形態である「矢」として流通していたであろうことを考えるならば、本稿で示しえた生産や流通の様相は必ずしも十分なものとは言い難い。「鍬」を改めて「矢」の一部品としてとらえる必要性を痛感するが、そのための前提作業として、本稿が示した鍬形式の変遷観と段階設定が寄与するところは大きいと考える。豊富な副葬品を持つ大型古墳から、鍬のみを副葬するような中小古墳までを、同一の議論の組上にのせることが可能となることは、古墳時代をより多面的な視野からとらえることにつながるものである。多くの先行研究が示すように、鍬研究の方向性は非常に多岐に渡る。それゆえに、本稿における一貫した方法論に立脚した編年を採用することで、雑多な論点を整合的に検討する道筋が得られると考える。そのための基礎作業として本稿を位置づけておきたい。

【謝辞】 本稿は二〇〇八年一月に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を再構成したものです。修士論文の作成にあたりましては上原真人先生、泉拓良先生、吉井秀夫先生に懇切なご指導を賜りました。阪口英毅氏、岩本崇氏、下垣仁志氏からは日頃から多くのご教示・ご助言を賜っております。論文作成にあたりましては京都大学文学部考古学研究室の非常に多くの方々から非常に多くのご協力を賜りました。

また、本稿を含めた修士論文の内容につきましては、二〇〇八年五月に古墳時代研究会において発表の場を賜りました。その折には多くの方からご意見をいただきました。

資料見学にあたりましては左記の方々、機関から多大なご配慮を賜りました。末筆ではございますが記して感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)

岩戸晶子 上野祥史 鈴木一有 高橋照彦 寺前直人 中井正幸 長佐 古美奈子 福永伸哉 細川晋太郎 真壁忠彦 真壁霞子 丸隈一心 水野敏典 山中一郎 吉澤悟 米田文孝 和田晴吾 飯塚市歴史資料館 茨木市教育委員会 宇治市歴史資料館 えびの市歴史民俗資料館 大垣市歴史民俗資料館 大阪城天守閣 大阪大学考古学研究室 大阪府教育委員会 大阪府立近つ飛鳥博物館 大牟田市三池カルタ・歴史資料館 小郡市教育委員会 掛川市教育委員会 榎原考古学研究所 榎原考古学研究所附属博物館 柏原市教育委員会 関西大学考古学研究室 荻田町歴史資料館 九州歴史資料館 京都国立博物館 京都市文化財保護課 京都大学総合博物館 京都府埋蔵文化財調査研究センター 京都文化博物館 古賀市立歴史資料館 倉敷考古館 御所市教育委員会 堺市博物館 佐賀県立博物館 さぬき市教育委員会 静岡市教育委員会 島田市教育委員会 城陽市歴史民俗資料館 新宮町教育委員会 世田谷区宇奈根考古資料室 高槻市埋蔵文化財調査センター 高月町出土文化財センター 高原町教育委員会 田川市石炭歴史資料館 筑紫野市教育文化

振興課 月の輪塚土資料館 東京都埋蔵文化財センター 同志社大学歴史資料館 徳島県埋蔵文化財センター 豊中市教育委員会 富田市文化財課 長岡京市埋蔵文化財調査センター 那珂川町教育委員会 中能登町教育文化課 奈良国立博物館 南丹市立文化博物館 延岡市教育委員会 浜松市博物館 東近江市教育委員会 兵庫県立考古博物館 福井市立郷土歴史博物館 福岡市教育委員会 福岡県教育委員会 藤井寺市教育委員会 藤枝市生涯学習部 藤岡町歴史民俗資料館 福島県立博物館 福津市教育総務課 松阪市文化財センター 宮崎県立西部原考古博物館 明治大学博物館 夜久野町化石・郷土資料館 山城郷土資料館 立命館大学考古学研究室 綾南町ふるさと資料館 若狭町歴史文化館

第10図11、第13図2の庭鳥塚古墳出土土織は〔河内一隆 二〇〇六「庭鳥塚古墳」『古市遺跡群XⅧ』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書五六〕より改変・再トレース。他は筆者実測・製図。資料の所蔵・保管機関は次の通り。〔津古生掛・小郡市教育委員会〕〔宮林・富田林市教育委員会〕〔雷野山・東近江市教育委員会〕〔平尾城山・京都文化博物館〕〔三池平・静岡市文化財課〕〔北玉山・盾塚・関西大学考古学研究室〕〔潜塚・大牟田市教育委員会〕〔丸井・さぬき市教育委員会〕〔寺戸大塚・妙見山・安土瓢箪山・京都大学総合博物館〕〔愛宕山・京都市教育委員会〕〔土師の里8号・藤井寺市教育委員会〕〔カヤガ谷2号・福知山市教育委員会〕〔鳥内35号・えびの市教育委員会〕〔野毛大塚・世田谷区教育委員会〕〔老司・福岡市埋蔵文化財センター〕〔真名井・野中・大阪大学考古学研究室〕〔会津大塚山・福島県立博物館〕〔セズノ・田川市教育委員会〕〔山王寺大塚・藤岡町教育委員会〕〔赤門上・浜松市教育委員会〕。

参考文献

- 岩井顕彦 二〇〇六 「有孔鉄鏃からみた古墳副葬鐵の系譜」『考古学研究』第五三卷第二号 五四―七二頁。
- 大澤元裕 二〇〇六 「杏仁形透孔付鉄鏃の特徴と展開」『古文化談叢』第五五集 一〇一―一二七頁。
- 神谷真佐子 二〇〇三 「銅鏃一考——篋被付柳葉式銅鏃について——」『続文化財学論集』第一分冊 二五五―二六〇頁。
- 後藤守一 一九一九 「銅鏃に就いて(一)―(六)」『考古学雑誌』第一〇卷第一号二―四七頁、第二号九二―九六頁、第三号一五六―一七二頁、第五号二六四―二八四頁、第六号三二六―三三三頁、第九号四七七―四八四頁。
- 杉山晋作 一九八〇 「古墳時代の銅鏃の二、三について」『古代探叢』一八一―二〇五頁。
- 杉山秀宏 二〇〇八 「両鎗造柳葉式銅鏃について——群馬県内の資料を中心に——」『成塚向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第四二六集 四七―四八四頁。
- 高木恭二 一九八一 「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告第三集 四四―七二頁。
- 高木恭二 一九八二 「圭頭斧箭式鉄鏃再考」『肥後考古』第二号 三六一―四一頁。
- 田中晋作 二〇〇一 「銅鏃について」『古代武器研究』第二号 五三―六一頁。
- 田中新史 一九九五 「古墳時代中期前半の鉄鏃(一)」『古代探叢Ⅳ』二四七―三〇八頁。
- 田中新史 一九九九 「古墳時代中期前半の鉄鏃(二)」『土筆』第五号 一七一―三二八頁。
- 戸田智 一九七六 「古墳時代の鉄鏃および弓の機能的分析」『古代学研究』七九 一―一六頁。
- 野上文助 一九六八 「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』第一四卷第四号 十一―四三頁。
- 野島永 一九九五 「京都府の古墳時代鉄鏃」『京都府埋蔵文化財情報』第五五号 五四―六二頁。
- 藤井大祐 二〇〇三 「南九州古墳時代鉄鏃集成」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』二五一―三〇〇頁。
- 松木武彦 二〇〇三 「古墳出現期の鉄鏃の様相——賜袂三角形鉄鏃について——」『初期古墳と大和の考古学』三五―三六〇頁。
- 村上恭通 二〇〇三 「大和における古墳副葬鐵の形成——ホケノ山古墳出土品を中心に——」『初期古墳と大和の考古学』三四〇―三五〇頁。
- 村上恭通 二〇〇七 「古代国家成立過程と鉄器生産」
- 森浩一 一九六三 「日本出土銅鏃地名表・銅鏃集成図」『北玉山古墳』関西大学文学部考古学研究紀要第一冊 六五―七七頁。
- 追記 脱稿後「水野敏典 二〇〇八 「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『福原考古学研究所論集』第一五 一七三―一九一頁」を知った。本稿では論じきれなかった鉄鏃の製作技法に着目し、編年をおこなうという重要な視点を提示したものと注目される。

The Transformation of Arrowheads in the Early and Middle Kofun Period

by

KAWAHATA Jun

Iron and bronze arrowheads were buried in tombs throughout the Kofun period and it has been thought that they may provide an indication of the date of tumuli. In order to determine precisely when the tumuli were built, it is necessary to elucidate the transformation of arrowheads and clarify when a particular arrowhead shape was made. However, chronological studies, particularly of the early Kofun period, are inadequate.

In this paper, I have aimed to establish the chronology of iron and bronze arrowheads in the early and middle Kofun period (from the middle third century to the late fifth century). First, I classified the arrowheads into 54 types based on the way an arrowhead is attached to an arrow and their shapes. Second, I divided 10 types into several subtypes that indicate different times of production. Third, I proved that the difference in subtypes really indicates a difference in the time of the production since the changes in subtype coincide with those in other funerary objects. I referred to many objects, such as Bronze mirrors with triangular rim and design of deities and animals, Japanese copies of them, Japanese Bronze mirrors, hoe-shaped bracelets, Cylindrical bronze objects and iron cuirass and so on. Fourth, I showed that in 28 tumuli that had a wide variety of assemblages of arrowheads and the other objects there is a correlation between the transformations of several varieties of the 10 types and the changes of the types and assemblages of the other objects. Through these examinations, I proved the rise and decline of all forms of arrowheads, establishing four stages of arrowheads through the early and middle Kofun period (phase I to IV).

Then, I considered the systems of manufacture and distribution through a comparison of the entire assemblage and individual assemblages. For the purpose of this study, the entire assemblage means all types of arrowheads that existed at any one stage and an individual assemblage means the complex of arrowheads buried in any one tumulus. At phase I and II the entire assemblage consists of many shapes and individual assemblages from each tumulus differ greatly. At phase III the number of the shapes included in the entire assemblage decreases

and the individual assemblages become uniform. The entire and individual assemblages begin to resemble one another. At phase IV the tendency grows more pronounced. The number of shapes included in the entire assemblage diminishes more, and individual assemblages are standardized. The entire and individual assemblages closely resemble one another. In short, in spite of the introduction of new arrowhead shapes at each stage, the number of shapes gradually diminishes. The changes in shapes and assemblages occurred at the time approaching the uniformity of phase IV. Consequently, arrowhead style had been standardized since the early fourth century (phase II). For this reason I think that until the beginning of the fourth century (phase I) the manufacturing system varied and distribution system was limited. Then, the manufacturing system had been united and the distribution system spread its boundaries step by step from the early fourth century (phase II).

The unity of manufacturing system and the widening of the distribution system, which started in the early fourth century, occurred simultaneously with introduction of early types of iron cuirass (*tatehagiita kawatoji tanko* and *houkeiban kawatoji tanko*), which are thought to have been distributed by the central polity of ancient Japan. New forms of arrowheads that were adopted early in the fourth century and late fourth century (phase II-III) were frequently associated with these iron cuirass. Consequently I surmise that the innovation of shapes and assemblages and the expansion of the manufacturing and distribute systems of arrowheads were promoted by the central polity of ancient Japan.

Orator and Emperor in Tetrarchic Gaul: The Connection between Court and Provincials in *Panegyrici Latini*

by

NISHIMURA Masahiro

This article focuses on Latin panegyrics from the late 3rd to early 4th centuries that are preserved in the corpus of *XII Panegyrici Latini*. A panegyric is a laudatory speech that is designed to be delivered on festive occasions for dignitaries and (especially) emperors. *XII Panegyrici Latini* contains 12 panegyrics by the Younger Pliny, Pacatus, Claudius Mamertinus, Nazarius, Eumenius of Autun, and other anonymous orators. Eight of these are concentrated in the years 289-313 and were delivered by Gallic rhetors mainly in Trier to praise imperial